

敬和学園大学と地域社会を結ぶコミュニケーション誌

KEIWA

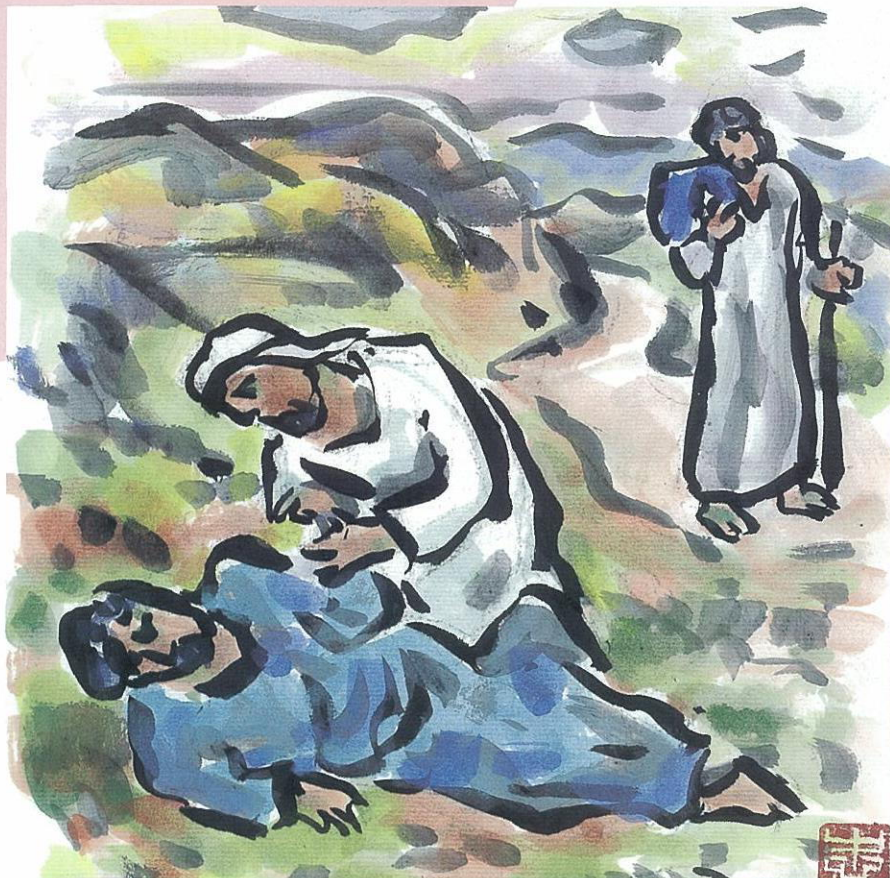
COLLEGE REPORT



第22号

〈April 2000〉

発行/敬和学園大学広報委員会



CLOSE UP

2000年度スタート！ 北垣宗治

退職される先生方

二十一世紀に備えたカリキュラム改革

就職指導室より／2000年度入学試験の結果報告

夜間コースはじまる／春名理事に名誉学位

1999年度学生表彰／ゼミ紹介

益谷先生著書紹介／映画鑑賞会報告

後援会事業報告

2000

去る3月22日に聖籠町町民会館において第6回卒業式が執り行われました。写真は、例年どおり、全員に卒業証書・学位記授与を行っているところです。今年の卒業生219名の4年間を思い出しながら、21世紀に向けてどんな活躍を見せてもらえるのか、期待と祈りをもって見守りました。

また式後、新潟グランドホテルに会場を移し、卒業生主催の盛大な「謝恩会」が開催され、例年以上の盛り上がりを見せました。卒業準備委員会の学生諸君の労苦に対し、心から感謝いたします。



もくじ

2000年度スタート	北垣宗治	1	ゼミ紹介	延原時行	10
退職される先生方		3	著書紹介	益谷 真	11
二十一世紀に備えたカリキュラム改革			映画『アイ・ラブ・ユー』上映会		11
	山田耕太	7	退職にあたって	斎藤祐介	12
就職指導室より		8	大学改革の時代	古田島徳夫	12
夜間コースはじまる		8	1999年度後援会事業報告		13
2000年度入学試験の結果報告		9	寄付者ご芳名		13
春名理事に名誉学位		10	学事予告		13
1999年度学生団体年度内表彰		10			

11000年度スタート!

学長 北垣 宗 治



キリスト紀元二〇〇〇年は新しいミレニアムの始まりを告げる年ですが、同時にまたそれは敬和学園大学にとって、きわめて特別な、大事な年です。それには大きな理由が四つあります。

第一は、この年、敬和学園大学が創立十周年を迎えることです。本学は一九九〇年十二月二十一日に文部省から大学設置の認可を得ました。あれから十年になります。この十年は、大学よりも二十三年早く新潟市大夫浜に設立された敬和学園高等学校の歴史に接ぎ木されるべき年数ですが、十九世紀の末に、つまり明治二十年から二十六年にかけて、新潟のクリスチャンたちによって維持されたキリスト教学校である北越

学館と新潟女学校が、わずか六年間の短命に終わったことを思いおこすならば、まことに祝福された長さであるといわざるをえません。明治期の先輩クリスチャンたちの悪戦苦闘を思えば、敬和学園は非常に恵まれていました。大学の十周年は、次の十年を目ざし、雄大なヴィジョンを求めて歩み始めるべき恵みの時であります。

この十年間に本学は一期生から五期生まで、総数千三百三十六人の卒業生を世に送り出しました。彼らはいま新潟とその周辺で、首都圏で、あるいは海外で活躍しています。企業の第一線で活躍している人、福祉の世界に献身している人、地方公務員として奉仕している人、大学院で研究に打ち込んでいる人等々、さまざまな人生を歩んでいますが、彼らはすべて、敬和の光をこの世に輝かせているのです。

第二に挙げなくてはならない理由は、三月末をもって七人の、生え抜きの先生方が学園を去られたことです。これは専任教員数の五分の一を上回る数です。そのうち六人、すなわち田原嗣郎、伊藤豊治、菅野浩、サンフォード・ゴールドステイン、片桐邦一郎、孫野義夫の諸先生は定年退職の方々の、これで敬和はいわゆる「大正生まれ」の

先輩教授は皆無となりました。あと一人斎藤祐介先生は、ご出身地の近くに新設される静岡文化芸術大学からの招聘に応じて、そちらに赴任されました。七人のうち三人は新潟大学から、二人は慶応義塾大学から、他の二人はそれぞれ北海道大学とアメリカのパーデュー大学からお迎えしたのでした。これらの先生方の残された精神的な遺産は目には見えませんが、本学の学風を構成する要素となっています。創立十年を迎える敬和学園大学には多かれ少なかれ新大、北大、慶大、そしてパーデュー大学などの要素が伝わっていることを、感謝をもって覚えたいと思います。

これらの退職の先生方に替って四月から石川喜一教授（生化学）、田中利幸教授（日本史）、杉村使乃講師（イギリス小説）、五十嵐海理講師（英語学）をお迎えし、それぞれの分野で清新の気を注いでいただくことになりました。中でも石川先生は新発田市出身のはじめての教授で、尺八の名手でもあられます。田中先生はオーストラリアの大学で長らく日本研究講座を担当してきた方で、先生を加えて敬和の国際色は一段と強化される筈です。若い杉村、五十嵐の両先生とともに新潟のご出身で、新潟市

とその周辺の出身者が学生の半数以上を占める本学では、年齢の近さを武器として、学生諸君の力になっていただけのことと思います。これら新人の先生方が、新しい要素を敬和に付け加えて下さり、敬和がさらに成熟していくことを楽しみにしています。

第三は、二〇〇〇年四月の入学生から、新しいカリキュラムが実施されることです。本学のカリキュラムは一九九一年発足当時のものをオリジナルとし、一九九五年に第一次改革として「読む」「書く」「聴く」「話す」の四技能を取り入れて外国語教育を充実したのでありますが、二〇〇〇年度の第二次改革は「コミュニケーション・コース」とセメスター制の導入を中心としたものになります。ただしこの新カリキュラムは新一年次生から適用されるのであって、二年次生以上の在生には従来のカリキュラムが適用されます。新カリキュラムでは一年次生の基礎演習二単位とポランテニア論一単位が必修となることも重要な特色です。

こんど設置される一年次生必修の「基礎演習」は、「本の読み方、内容の要約、口頭発表の仕方、ノートの取り方、レポートの書き方等によって大学生活で必要な学習方法の基礎的な訓練」をすることを目的としています。本の読み方というのは大学生にとって最も基本的な能力です。それと並んで、自分の考えを明確に、論理正しく文章で表現できる（言語化できる）という能力もまた必須のものであります。私はこれまで英語英米文学科の選択科目で、三、四年次生が履修する「文化・文学比較論」を担当してきましたが、課題図書を読んで正確に理

解できる学生がいかに少ないか、さらに、それについて自分の考えを正確に記述できる学生がいかに少ないかを痛感してきました。それゆえこの「基礎演習」に期待するところが甚大であります。

第四に、敬和学園大学は二〇〇〇年を期して、教職員の意識の改革をはかりました。従来の大学には「ぬるま湯」に浸かっているような一面があったことは事実です。大学の教員はいったん採用されると、適当に教室で学生を教え、適当に論文を書いていれば昇進でき、そのまま無事定年まで勤めることができました。一九六九年を中心とする大学紛争の時期は別でしたが、その時期が過ぎ去ると、再び平和が学園に戻ってきて、ぬるま湯が復活しました。しかしながら、大学の「古きよき時代」は完全に終わりを告げたのです。いまや大学は絶えず自己を点検し、改革をはかつていかなければ倒れる、いな、改革をはかつてもお倒れることがあります、という時代に入ったのです。大学の外の世界ではリストラの風が吹き荒れています。いまや大学は国立であろうと私立であろうと、危機的な状況に立たされていることには変わりありません。改革をはからない大学は学生たちに見放されます。敬和学園大学はこの反省に立って、キリスト教主義という建学の理念の原点に立ち返り、学生一人ひとりと本気で取り組む大学になる決意を致しました。

私は退職された七人の先生方に心からの御礼を申し述べて拙文を結びたいと思います。田原先生と伊藤先生は、開学時からそれぞれ国際文化学科と英語英米文学科の学科主任（学科長）として重鎮であり、それ

ぞれの学科の基本的なムードを方向付けて下さいました。両先生のご発言には重みがあり、それに反対論を述べることは困難でした。田原先生は他の追隨を許さない勉強家で、一つの講義をするためにも何冊かの本を読まれ、同じ講義を繰り返さない方でした。伊藤先生は授業があらうとなかろうと毎日研究室に通われ、助言を求めてドアを叩けば、いつも快く応じて下さいました。難解をもって聞こえるゴールドディングの『通過儀礼』の本邦初の翻訳と詳註を完成されたことは、大きな成果でありました。

菅野先生は長らく就職委員長として本学の学生の「出口」を担当され、よい路線を敷いて下さいました。また国際文化学科長として穏和な語り口で学科内をまとめられ、今後の大学運営のモデルを提供していただきました。ゴールドSTEIN先生はアメリカのよい大学の良心とけじめを敬和に導入して下さいました。

片桐先生は慶応義塾から親身になって学生の世話をする精神をもたらされ、「大学は面白いところ」という私の主張を裏書きして下さいました。孫野先生は学問的な厳しさに人情の厚みを兼ね備えた方で、先生の豊富な人的ネットワークを敬和はフルに利用させて頂きました。

斎藤先生には学生委員として、また就職委員長として、学生たちを懇切丁寧に指導いただきました。

本学はこれらの先生方のご貢献を決して無にすることなく、新しい決意のもとに歩みを始めます。先生方、長い年月にわたり、本当にありがとうございました。お元気でなにとぞ永らく、敬和を見守って下さいませようお願いします。

退職される

先生方

敬和学園大学との関わりの 始まりを回顧する

国際文化学科教授

田原 嗣郎



一九八七年十月十七日、安藤弘君から電話があった。新発田と新潟の間に九十年にキリスト教の新しい大学ができるのだがそこに来ないかというのである。それが始まりだった。翌年の一月三十日に私は妻と新潟に行った。学長に予定されていた野本森萬氏に会うのと天候の最も悪い時期の新潟を体験するのが目的だったから、強風で飛行機が欠航したためもあったが、二月はじめまで滞在した。

それが三月十六日には文部省に出頭するよなことにまでなってしまったのである。伊藤先生にお目にかかったのはこの時が初めてだったが、それ以後はいつもご一緒することになった。文部省で役人に会う部屋は物置同然の感じで、誰かが持ってきた書類らしいものが風呂敷包みにして壁際に積み上げられていた。

同月二十四日に札幌から新潟に着いた。これからはいつもそうだったが、新潟空港には長澤さんが迎えに来て下さっていた。二十六日と二十九日に文部省に行った。その間は新潟に滞在した。上越新幹線にはこの時初めて

乗った。文部省では主に学科内容の説明をした。それを決めたときのことを何も知らないのに、計画書をみて説明を捻出したのである。二十九日はいつもの物置のような部屋ではなく、政務次官室、大きく立派な部屋だった。稲葉代議士がやってきて役人を叱咤したりしたし、新発田市長・聖籠町長などの関係者が何人もいたように覚えている。この時の書類は受理され、大学設立の第一の関門である農地転用が可能になったのだ。

この後も、五月十二日から四日間、新潟に出かけ、七月五日、十四・五日、二十六日から二十八日、さらに十月九日から十一日と札幌から東京に出張し、文部省に行ったのだが、三月の後にはもう出る幕はなく、ただ行っただけだった。

そして十一月二十八日に野本先生から電話があった。それによると、十日の法人としての審議で不合格、私学審議会では三月の文部省の受理は誤りとしたとのことだった。野本さんは文部大臣から、来年もう一度提出するようにと云われたそうだが、とにかくこれで一段落した。敬和学園との縁も切れそうになった。翌年一月二十四日、笹神村五頭温泉で常任理事の諸氏と語り合っただけ後は雑用からは完全に免れ、もう札幌から出かけることもなくなった。

その年の暮れになって大学設立の見込みがたち、久しぶりで新潟に招かれた。二十六日に初めて新発田に聖籠の現地をも訪れたのだが、その日は冬の新潟には不思議なほどのよい天気で、東映ホテルに勢揃いした諸先生を見てみると、どうもこれは本当に「大学」ができるらしいと、狐につままれたような気持ちになるのだった。

大学を去るにあたって

英語英米文学科教授

伊藤 豊治



私の最終講義はウイリアム・ゴールデンの『通過儀礼』についてであった。この小説は最終年度の演習で用いたり、また敬和学園大学での九年間、教育のかたわら、注をつけたり翻訳したりしてきたものであった。長いあいだ私は小説を読み教え続けてきたが、これが最後にたどりついた作品である。ノーベル文学賞作家にふさわしい見事な創作である。

私が小説を読み始めたのは、戦時中の旧制高等学校時代である。あの頃は英米の小説は読まず、専らフランスやロシアの小説を読んだ。フロベール、モーパッサン、スタンダール、そしてバルザック、その名を思い出すだけで涙がでるほど懐かしい。そしてロシアの小説。ドストエーフスキー、トルストイ、ツルゲーネフにゴーゴリ、どの作家の作品も夢中になって読んだ。殊に『カラマーゾフの兄弟』、今でもあらゆる小説のなかで最高の作品だと思っている。

そんなわけで、大学に進学する時フランスかロシア文学でも選べばいいものを、高校のクラスが文甲（第一外国語が英語）だったこともありイギリス文学科を選んだ。当時、大学では中野好夫先生がシェクスピアの講読をしていたが、それが素晴らしい授業で教室は学生があふれるばかりの盛況であった。そうしたことも刺激になり、本格的にイギリス文学に取り組みむ気持ちにな

敬和学園大学を去るにあたって

国際文化学科教授 菅野 浩



敬和学園大学ですこした九年間、すぎてみればはやいものです。一九九一年の三月に新潟大学を定年退職した

せつかりました。初めの二年間はよかったです。一回生が三年次に進む頃から大変なとなりました。私立大学の就職指導が大変なものだと分かってきたのです。こちらも学生も初めてのことでしたから、諸大学の就職指導を参考にしながら、就職相談室の整備、就職の手引きの作成、企業との接触、ガイダンスの実施、公務員講座の開講、事務局との折衝など、就職委員の方々と相談しながら猛然と忙しく過ごしました。ともかく就職率が八十五%位に到達し、十二名も公務員に合格してくれたことは幸いでした。今より熱心な学生が多く、夏休み中もほとんど毎日就職相談室で学生の相手をしように思います。内定をもらって報告にきてくれた時の学生の嬉しそうな顔も心に残ります。何新聞だったか忘れましたが、新潟大学の経済学部出身の記者が新米就職委員長の奮戦ぶりを新発田地方版の「時の人」欄に載せてくれたこともありました。新設大学の就職を報道するテレビを見た知り合いの人たちから「先生、就職委員長をやっているんですか。大変ですねー」などと言われました。懐かしい思い出となりました。

最後の三年間の学科長も、皆様のご支援助とご協力でなんとか無事に過ごせましたことを心から御礼申し上げます。

国立、私立をとわず、これまでのような大学の存続が難しい状況に進んでいることは大変遺憾に思います。そのような状況に流されず、敬和学園大学が理想をかげがて学生を教えることのできる大学として発展してゆかれますことを心から願っております。

った。卒業論文はシエクスピアだったが、そのうちオルダス・ハックスリーの作品に強く引かれるようになり、そしてその関係でD・H・ロレンスを読み始め、やがて二十年代の作家達、フォスター、ジョイス、ウルフ等に手を広げ、更にさかのぼってエミリー・ブロンテやジェン・オーステンなどもやってみた。そして大学の専門授業では、そうした作家の作品を用いた。

ただ研究の対象として文学作品に接した場合、高校時代に経験したあの感激をおぼえることは少なくなつた。やはり文学は研究の対象ではなく、楽しむべきものなのかも知れない。ただ、最近のイギリス小説は技巧が極度に発達して、寝転んで読んでいては、その良さを十分把握できないようなものが多くなっている。繰り返し読むことによつて、初めてその良さが理解できるような作品が多くなっている。ゴールデンングの『通過儀礼』などはその典型である。

最終講義においても話したが、この作品の主人公は極めて真面目で熱心な若者である。その無邪気な若者が、理想という星を追い求めて足元にあいた穴、「酒色」という穴に落ちるといふ悲劇である。小説はこの主人公を中心に様々な事件が複雑に展開するものだが、実に面白い。そして技巧が実に見事である。二度、三度と読み返すことによつて、作品の面白さが一層よく解るといった類の小説である。そういう作品を授業のテキストとして取り上げることが出来たこと、そしてそういった授業ができる大学に在職できたことを、誠に有難いことと思ひ、感謝の気持ちで一杯である。

あと引き続き四月から創立敬和学園大学に奉職しました。新潟大学の場合も開学の一九五九年六月から勤めました。昨年創立五十周年を迎えましたので、私の教員生活も五十年ということになります。ということで、敬和学園大学を去るのは、永かつた教員生活へのお別れということでもあり、ひとしお感懐深いものがあります。

新潟大学では細胞という極微の世界の探求に終始しましたが、敬和学園大学ではまるで違った世界の体験でした。国際文化学科の諸先生の授業科目は魅力的で、こっそり聴講させてもらえないかなーなどと思ひながら、ついに実現できなかったことを少し後悔しています。東欧や北欧をまわってみますと、歴史、宗教、美術などの教養のなさが非常に残念に思われ、これから勉強したいという気持をつよく感じました。世界がすぐくせまくなつた今、世界の国々の社会制度、歴史、宗教、美術などを勉強しておくことは、若い人たちにとつても非常に大切なことだと思います。

もっとも想い出に残ることの一つは就職委員長の仕事でした。教員は複数の学内委員会に所属せよということで、就職委員会を申し出ましたが、年長者のため委員長を仰

わたしの引退

英語英米文学科教授

サンフォード・
ゴールドステイン



わたしにはひとりの叔母がいて、彼女に会うといつもわたしに「サンフォード、けっして引退しないで！」

といいます。彼女の言葉を聞くたびに、わたしはロバート・ブラウニングの「ラビベン・エズラ」という詩に出てくる老ラビ（ユダヤ教の律法博士）のことを想起します。彼は「人生の最良の時はこれからやってくる」といいます。このラビは英語教師のことを考えていたとは思えないけれど、たぶん彼のいうことは的はずれではないようです。

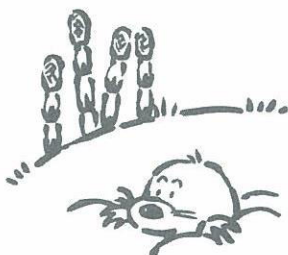
わたしはこの五十年間英語教師であったことを些かも悔いていません。でもわたしは引退したくないというのが本音です。わたしのアメリカでの前任校は、パーデュー大学で、停年制を布いております。教師は好きなだけ長く大学に留まることができます。しかしわたしは、敬和学園大学との「義理」をはたすために、パーデュー大学を退職してきました。そして今、敬和学園大学の仕事を与えていただきましたが、わたしに退職をせまっております。

多くの人々は、引退は黄金の機会であると考えている、とわたしは推測します。すくなくともアメリカ人はそう思っているようです。わたしのかつてのパーデュー大学

の同僚たちのなかには、六十歳をまたぎずして退散した人も多くいます。教えることは必ずしも容易なことではありません。パーデュー大学の教員たちにくらべて、敬和の先生方は、より多くのコマ数を持ち、より多くの会議があり、より多くの義務があります。日本では教員に繁多な職務を強いておられます。日本の教員たちが、退職についてどのように感じているのか、わたしには分かりかねます。

わたし？わたしには、黄金の世界へのロマンチックな引退といったビジョンは、まったくありません。なんとか生活は存続させていくでしょうが、変化に適応することはむずかしいのです。わたしは今までにずっとやってきたことと同じことを継続していくように思います。同じような孤独や後悔に苦しむことでしょう。そして、敬和で毎年挑戦してきたように、新しい分野の研究をも試みたりするでしょう。

わたしは、だいたいな敬和にさようならをいいます。わたし自身の願いは、敬和の先生方は、敬和でいつまでも教鞭を執り続けることができ、先生方が希望するその時が来たら、敬和から退職することができるようになる、ということなのです。



学生のみなさんといっしょに

国際文化学科教授

片桐 邦郎



もう十年以上になるが、新潟に新設の大学ができるが、行かないかという話があった。設立の時から参加した

が、実際に赴任したのは、私が前任校の慶応義塾大学を定年で辞めた一九九二年四月からであった。

私を持つ講義の「欧米文化論」は三、四年の必修であったので、最初はまだ学生がいなくて「文学」を担当した。

また、私が外国人に日本語を教える「日本語」をやっていたので、留学生の「日本語」も担当し、また「フランス語」も一時は教えた。

私は、若い人たちが好きだ。いっしょに話したり、勉強するのは楽しい。だが、新潟に来て、気が付いたことは、学生諸君に自己表現の力が貧しいことであった。

そこで、「学生新聞」を創ることを呼びかけた。四、五人をあつめるのに二年かかった。何しろ取材、編集、校正など初めての者ばかりで、「初校ができたよ」というと「しょこうって何ですか？」という応えが帰ってくる始末だった。新聞部の名刺をつくってやり、私の研究室を部室代わりに開放した。なんとか毎号三千部を四年間続けることが出来た。新潟の新設の大学では、一番初めに学生新聞ができたのに、四号で挫折した。最後の部長の学生が後輩を集めなかつたからである。

学生は、大部分が「いま」「こんにち」はあるが、未来も過去も考えない。

学園祭も同じで、「打ち上げ」や「胴上げ」はするが、「引継ぎ」は、不十分である。悲しかった。もうあのようない「まともな学生新聞」はできないだろう。

「敬和祭」についても、学園祭とは単なる「お祭り」ではなく、あらゆる「ゼミ」が参加して、地域や受験生に「大学とは何をしているか？」を知らせる機会なのだ。

赴任して、何人かで呼び掛けたが、毎年数人のゼミが参加するだけであった。ここ数年参加のゼミが少し増えたが、地域と離れた大学など、存在の意味が無いといつていいだろう。

ここ数年の少子化で、地方の大学の存立が問題となっているが、設立の原点に帰って考えるべきだろう。落ち着いたらそんなことを書いてみたいと思っている。

学生諸君や、卒業生の方々も私の部屋でいろいろと話したことを思い出してほしい。

今年、年賀状に小さい字でギッシリと感想などを書いてくれた人が多かった。

卒業生からも結婚したとか、何月に子供が生まれる予定とか書いてくるのがある。

卒業したら、一人前の社会人としてつきあおうねといつてある。これからも時々手紙で消息を知らせてほしい。いつでもまた新潟に逢いに来ようと思っている。

ゲンゴガク拾遺

英語英米文学科教授

孫野 義夫



むかし、中学の授業科目に博物というのがあった。日本博物学史などに書かれているが本草学の流れをくむ植物学、それに動物学、鉱物学などの知識をおしえるものであった。言語学の前身である博言学という名前を最初にみつけたとき、この博物学への類推で、色んな分野、この場合はさまざまな言語を扱うものだろうとおもった。ゴガクの百貨店という印象

だった。いまでも、大方のひとびとの受け取り方に大きな差はなさそうである。日本で、外来の比較言語学という分野が言語学の出発点になったという事情が、この百貨店式理解をおしすすめたはずである。比較するには複数の対象がなければならぬからである。すこし横にそれが、戦後すぐ米国人ペイは、ゲンゴガクは民主主義的の学問だとかいた。敗戦直後の流行語だった民主主義という言葉の幻術的用法に食あたりをしていたせいとか、それを見て、とにかく妙な気分になった。

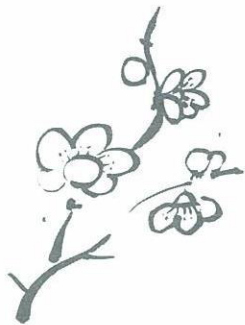
大学時代、言語学をやっていくための条件として、どんなものが必要かという話題でかたりあった。京都の酒のみながらの、今はやりの疑似デパートである。酔余の結論のひとつに「惜しみなく忘れる」があった、ような気がする。

言語学科のきまりとしてかなりの数の外国語を、同時に並行してまなぶとき、未知

の文、新しい語彙の応接におわれるわけで、どんどん覚えるかたわら、いつぼうで、ほとんどん思いだせなくなるものもふえるのは、自然の理である。そのところで、忘却というきびしい現象にホゾをかんでも、はじまらない。そういった気分が、この結論みたいなものの中に、こめられている。一種の、忘却恐怖対症療法である。

ここでの問題は記憶である。とくに短期記憶のそれで、思い出せなくなったからといって消失してしまっているわけではない。意識下で昇華しているとすべきである。第一次の情報、抽象化という整理階段をのぼって第二次の情報になっているのである。

第一次記憶の保存に、コンピュータという物理療法が登場して、ひさしい。言語という具体的な現実を記憶、再生するための道具がととのったのであるから、知性をもつ動物として、人間の脳がいつまでも、丸ごとおぼえましよう式の次元にとどまっていって良いわけではない。脳が文や語を記憶するためのたんなる入れ物におわらず、そこに、もつと体系的、有機的な思考にむかおうという意欲がめえはじめたとき、博覧強記の物知りではなく、その人はすでにして言語学者である。



二十一世紀に備えたカリキュラム改革

教務部長 山田 耕太

カリキュラム改革のねらい

二〇〇〇年度の入学生から本学のカリキュラムが大きく変わり、大学教育が大幅に刷新されていきます。それは第一に、高校の卒業生ばかりでなく、社会人や留學生や編入生をも含めて、多様なニーズや学力を持つ学生の一人ひとりの人格を重視した教育を行うためです。第二に、自分で課題を発見し、情報を発信する教育を行うためです。特に、二十一世紀の諸問題群の課題に取り組む人を育てていく願いが込められています。

本学では、一九九五年度に外国語等の共通基礎科目(旧一般教育科目)を中心としたカリキュラム改革と組織替えを行いました。二〇〇〇年度は専門科目を中心としたカリキュラム改革になります。

カリキュラム改革の理念

本学は教育理念として「良心的な国際的教養人の育成」を掲げてきました。具体的にはキリスト教主義の人格教育、国際主義の外国語教育と異文化理解を教育理念に据えてきました。しかし、二十一世紀の教養人は以下の基準を満たすことが必要でしょう。

- ① 母国語で批判的に考え、文が書けること。
 - ② 少なくとも一つの外国語が使えること。
 - ③ 自文化と共に異文化が理解できること。
 - ④ コンピューターが使えること。
 - ⑤ 倫理的に考え、行動ができること。
- 一九九五年度の改革と併せて、二〇〇〇

年度のカリキュラム改革では、このような理念の実現を目指しています。

コース制度の導入

専門科目の改革の第一の柱は、コース制度の導入です。従来の英語英米文学科の専門科目を言語を中心とした英語学コースと、文学を中心とした英米文学コースに分け、国際文化学科の専門科目を文化の基底にある宗教・思想・歴史を中心とした比較文化コースと、文化の上層にある法・政治・経済を中心とした国際関係コースに分けます。さらに両学科に共通のコミュニケーション・コースを新設します。

コース制度は学生のニーズに応じて、一つのコースの科目を深く集中して学ぶこともできれば、一つのコースに所属しながら、他のコースの関連する科目を選択することもできるように、他のコースにも開かれ、緩やかに設定されています。また、それぞれのコースへの入門科目が新設され、環境、人権、平和、アジア等の二十一世紀の諸問題群に力点を置いた科目が設置されます。

基礎演習の新設と専門演習の改革

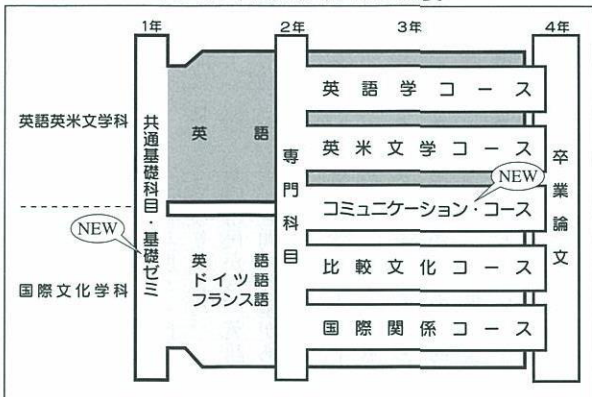
課題探究型、情報発進型の教育は、講義ではなく、演習という授業形態が必要になります。改革の第二の柱は、少人数で双方向の演習を大学教育の中心に据えたことです。そのため、大学で必要な論文の書き方や口頭発表の仕方などを訓練する基礎演習を新設し、従来、三、四年でそれぞれ原則

として一科目しか選択できなかった専門演習を二、三年に降ろして複数履修できるようにし、一年の基礎演習、二、三年の専門演習、四年の個人指導の卒業論文まで希望する学生は少人数の演習と個人指導を一貫して受けることができるようになります。

学習支援体制の充実ほか

改革の第三の柱として、セメスター制度の導入、GPA制度(成績の平均点制度)の導入、アドヴァイザー制度の充実等によって学生の学習支援体制を整備して、少人数でより一層丁寧な教育をしていきます。この他、ボランティア論を新設し、ヘルパー三級や二級の資格が取れる道を開きます。

2000年度カリキュラム概要



就職指導室より

四年次生は、今年も厳しい就職戦線にチャレンジ中です。

就職協定が廃止されて三年目を迎えた昨年度の就職戦線は、これまでになく厳しい状況で推移し、求人倍率は〇・九九倍と一倍を割り、「超氷河期」といわれた九十六年度の一・〇八倍を下回りました。

このような厳しい就職環境のなか、新四年次生は、すでに三年次の後半から就職活動を始めており、合同企業説明会、会社訪問、採用試験と頑張っています。

就職指導室では、三年次の春から月一回のペースで就職ガイダンスを実施して来ており、昨年四月の「就職活動を始めるにあたって」に始まり、「就職活動の流れ」「就職活動の常識」「インターネットによる情報収集」「厳選採用にどう備えるか」「作戦要務令」「会社訪問実践講座」「面接の心得」等、三年次終了までに計十回のガイダンスを実施して参りました。これは学生諸君が他大学の学生に打ち勝ち、より満足度の高い就職を勝ち取ってもらうためのものです。

本学では去る二月二十四日(木)に恒例の学内合同企業説明会を本学体育館を会場に開催いたしました。この説明会は新四年次生を対象に毎年この時期に実施するもので、今年も県内を中心に四十七社の企業の皆様にご参加いただき充実した説明会となりました。開会に先立ち、北垣学長から企業の皆様に、昨年度の採用のお礼と、新四

年次生の就職に対する一層のご協力をお願いし説明会に入りました。企業の方々の熱いこもった説明は学生の就職意欲を駆り立てるものであり、出席した百八十名余りの学生もそれぞれの企業の説明に熱心に耳を傾けていました。

今年も昨年以上に厳しさを増す就職戦線が予想されるなか、大学としては一人でも多くの学生が満足のいく就職ができるように万全を期すことはもちろんですが、保護者の皆様からもより一層のご支援とご協力をいただきたいと思います。

なお、四月より「就職相談室」の名称を「就職指導室」に変更し、より学生への就職指導を前面に出すことにしました。



夜間コースはじまる

敬和学園大学をもっと市民に利用していただくために、二〇〇〇年度から授業の一部を夜間に行うことになりました。

これまでに何人かの市民から、英語を本格的に勉強したいが、昼間は仕事があつて授業に出られないので、夜間の授業をしてもらえないか、という希望が出ていました。この度、ブラウン先生の「インターネット英語」と、ウイリアムズ先生の「ビデオ・リスニング」を、両先生からの積極的な提案と、外国語改革委員会の決定によって、夜間に設置することが決まりました。

それに刺激をうけて、本学として幸いにも延原先生から「哲学」(前期は哲学入門・サルトルとデカルトの間、後期は哲学入門・サルトルと地球時代の宗教哲学)、客員教授の若月先生から「文学」(坂口安吾の文学を中心に)を夜間に講義をすることを引き受けて頂きました。

ブラウン、ウイリアムズ先生の英語科目と若月先生の科目は、パソコンやビデオ機器を使う関係等から本学の教室で行いますが、延原先生の科目は、新発田市生涯学習センターの教室で講義されることになりました。夜間の授業時間は午後七時から八時半の九〇分間です。一人でも多くの市民が「科目等履修生」として参加されるよう期待いたします。なお、これらの科目は本学の学生諸君にも、むろん開かれていますから、ふるって参加してください。

◆開講する授業科目(左図をご覧ください)

二〇〇〇年度入学試験の結果報告

推薦入試はすでに昨年十一月に終わっており、昨年度とほぼ同数の新入生を迎えることになっています。

一月から二月にかけて一般入試（A日程・B日程・センター入試）が実施されました。

まず一月十五日（土）、十六日（日）の両日、受験シーズン本番を告げる大学入試センター試験が全国一斉に実施され、本学試験場では三百四名の受験者を迎え無事に試験を終了することができました。

一月三十一日（月）には、本学の一般入試「A日程（二科目型）」が全国四会場（本学、新潟、長岡、東京）で、翌二月一日（火）には「B日程（二科目型）」が新潟市内の試験会場でそれぞれ実施され、欠席者もほとんどなく、試験を無事に終了しました。

その後、入試委員会と教授会で慎重に協議した結果、合格者を下表のように決定し、二月九日（水）に発表しました。

また、三月十一日（土）には本学において一般入試「C日程（課題面接型）」が実施され、その他の入試と同様、学内において慎重に協議の結果、下表のように合格者を決定し、三月十七日（金）に発表しました。

なお、下表以外に、外国人留学生入試で国際文化学科に二名の合格者があります。全入試の志願者数を昨年度と比較すると、六〇%となりました。志願者が減少したことは残念ですが、近隣の大学も志願者を減らしている状況を勘案すると、この傾

向は本学に限ったものではないと判断しています。

今後とも十八歳人口の減少と長期化する不況によって、厳しい入試環境が予想されますが、本学に相応しい入学者を迎えるため、精一杯努力いたしますので、ご支援の程、よろしくお願いいたします。

（入試委員会 入試室）

2000年度入学試験の結果（特別入試を除く）

学 科	入 試 区 分	募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	実質倍率
英語英米文学科	推薦入試	50	54	53	53	1.0
	一般入試（A日程）	20	33	33	33	1.0
	一般入試（B日程）	15	19	18	18	1.0
	一般入試（C日程）	5	7	6	6	1.0
	一般入試（センター入試）	10	38	38	38	1.0
	学 科 計	100	151	148	148	1.0
国際文化学科	推薦入試	50	44	44	44	1.0
	一般入試（A日程）	20	29	29	29	1.0
	一般入試（B日程）	15	30	29	29	1.0
	一般入試（C日程）	5	17	15	15	1.0
	一般入試（センター入試）	10	48	48	48	1.0
	学 科 計	100	168	165	165	1.0

木曜日	水曜日	火曜日	月曜日
インターネット英語 講師：James Brown	哲 学 講師：延原 時行	文 学 講師：若月 忠信	ビデオ・リスニング 講師：Joy Williams
インターネット上では、情報のほとんどが英語で交換されています。インターネットで自分の読みたいものを選び、書きたいことを書けるようになることを目標にして、英語とインターネットの両方を学びます。	世の中でいちばん不思議なことは自分が存在している事実です。本講義では、滝沢克巳著『朝のことば』を手掛かりにしてこの事実をデカルトとサルトルの間に探ってみます。	新瀧の作家に親しむという視点から、坂口安吾の人と作品を講義します。『墮落論』、『白痴』を含む小説、エッセイをできるだけたくさん読み、安吾文学の背景についても詳細に考察する予定です。	年間約6本の現代アメリカ映画（『クレイマー・クレイマー』、『自由への大いなる歩み』など）を英語字幕付きのスクリーンで見ながら、英語で聴いたり、話したりする力を高めます。

春名理事に名誉学位

敬和学園大学は三月二十二日の第六回卒業式において、学校法人敬和学園理事を十六年間務めてこられた春名康範牧師（日本基督教団新潟教会）に名誉文化博士号を贈りました。春名博士は四月から神戸女学院中高部に奉職されることになりました。

春名先生には毎年チャペルで講和して頂きましたから、覚えていらっしゃる人も多いと思います。伊丹教会の教会学校で若い頃の延原時行先生の感化を受け、同志社大学神学部をへて牧会に入られました。愛媛県今治教会を振り出しに、東京の早稲田教会、王子教会を経て、新潟教会に赴任されました。

十年前の本学の誕生は実は大変な難産でした。新潟市と聖籠町と新潟県がそれぞれ創設費の大部分を用意してくださったとはいえ、不足分はすべて募金でまかなわなくてはならず、先生は理事として地方自治体との折衝、募金、教員探し、文部省との交渉など、涙なしには思い起こせないほどの苦勞をされたのです。

先生の体当たりの説教は聞くものの胸に強く響きました。教会のカラに閉じこもることなく、ポナペ島でのワークキャンプ、北朝鮮の飢えている子供たちのための救援米の調達、「越冬友の会」代表として、冬のさなか、ホームレスの人たちのための炊き出し等を指導されました。

ぜひお元気で、新しい任地でますますご活躍されるよう祈ります。

一九九九年 学生団体年度内表彰



去る一月十七日に、一九九九年 学生団体年度内表彰者にたいする表彰式が行われました。今年度は、次に紹介する三名の個人と、一つの団体が表彰され、学長から表彰状と本学後援会の援助による活動援助金一封信が贈呈されました。この後、学長を囲んで懇談が行われ、学長から感謝の意が述べられるとともに、今後もさらに充実した活動を続けてほしいとの激励の言葉がありました。

今年度の表彰者と表彰理由をお知らせします。

少林寺憲法部

藤塚俊一・大見直樹・新潟県大会 組演武 一般二段の部 第一位 全国大会出場

Makes's

鍋田慎介・新潟県サーフィン選手権大会 MENの部 第一位 全日本大会出場

FMラジオサークル

一九九七年のエフエムシバの開局以来番組を製作し、毎週土曜日の十七時三十分から十八時の時間帯に放送を続けており、本学の存在を地域に大いにアピールしている。

以上の三名と一団体です。来年度も各クラブの活躍を期待しています。

ゼミ紹介

延原ゼミの面白さ

国際文化学科教授

延原 時行

延原ゼミで一番面白いのは（先ず担当者の視点から見ても）、ゼミ生諸君の、ものを考える上での成長です。その証拠に、二月十二日に開催した卒業論文発表会での今春卒業した諸君の論題をご披露しましょう。

*

宮本靖大「アメリカの黒人奴隷制度」

大平智良「多民族国家ユーゴとコソボ紛争」

長嶋幸二「日本の精神性について」

丸山竜馬「仏教とキリスト教の『対話』の

必要性」

中嶋賢太郎「城郭に見る日本人意識」

*

二十名の出席者のうえで「四年間のまとめが出来てうれしい」と頬に笑みを浮かべて口々に感激を語る諸君の言葉を聴きながら、「本当によかった」という思いに皆が酔い痴れました。茶菓あり、スナップ写真あり、三年生の「自分たちも書きそうな気がしてきた」というコメントあり。

思うに、大学の学問の最先端は、教授のプロジェクトが学生のプロジェクトを学問の自由な精神において触発するところにあります。若人よ、羽ばたけ、君たちは、自己中心から実在中心へと呼び出されているのだ。延原ゼミのモットーは「共に成長」であって、「猫可愛がり」ではありません。

益谷真 著 『心と行動のサイエンス』



この本は大学等の教養科目になっている心理学や行動科学の講義でワークブックとして使うために作成されました。普通のテキストでは、知識の解説が中心となっていますが、この本ではそういった講釈のたぐいは省かれています。なぜなら、知識の解説は、講義の担当者が受講者の顔を見ながら、熱意をもって言葉を選びながら進めべきだと著者たちは思っているからです。そもそも入門段階では、科学としての心理学を学ぶ前提が理解できていないことも珍しくありません。学生の多くは、高校

での勉強の延長線で講義を受け、自分で考えるということがなかなかできません。そこで、身近で心理的な問題を科学的に考える見方を身につけてもらうために、この本では主体的に取り組んでもらう大小百四十三の「考えてみる」問題が用意されています。それらの間には絶対唯一の正解はありませんし、教科に特有な知識（例えば面積の求め方など）も必要ありません。人間の行動のことを、あるいは心のはたらきについて、どれだけ個人的な見方や解釈をしているかを露わにして、ではいったい科学としての心理学はどういった見方や事実を示すのかという問題意識をもって講義が受けられるようにデザインされています。

少し裏話を明かすと、この本のコンセプトが煮詰まるまでに著者らは、過去十年間に出版された百八十冊にもおよぶ心理学のテキストの内容を分析したり、素朴な信念や暗黙の知識の実体を把握するために、のべ四千余りの予習ノートを添削しながら、ワークのための課題や設題を検討してきました。この本はその副産物と言えるかもしれません。おかげさまで、いくつかの国立大学でも使用されていますが、半期でこなすにはハードな内容だという評もいただいています。是非みなさまにも一読ではなく、じっくりとチャレンジしていただければ幸いです。

映画『アイ・ラヴ・ユー』上映会

三月十九日（日）に、本学バーム館（体育館）で、新発田市聴覚障害者福祉協会、新発田市ボランティア連絡協議会主催の映画『アイ・ラヴ・ユー』の上映会が行われました。

上映された映画は、ろう者と聴者の監督二人が共同演出した笑いと涙の感動作で、注目されている話題の作品です。聴者の夫とろう者の妻、そして聴者の娘の三人家族が映画の主人公です。愛と信頼で固く結ばれた三人が、常に前向きで懸命に生きる姿は、観る人々に感銘を与えます。ろう者のありのままの姿を、ろう者の側からろう者の視点で描いた初めての映画です。妻役は、全国のろう者から、オーディションで選ばれた忍足亜希子さんが熟演しています。



本学での映画
上映は、午前十一時からと午後一時三十分からの二回行われ、それぞれ四、五百人の一般の方々が、訪れました。

当日は、前日までの雨がうそのように晴れ、心配された体育館の温度もいつもより暖かくなりました。

主演女優の忍足亜希子さんから午前午後とも舞台あいさつがあり、最後には来場者全員で、「アイ・ラヴ・ユー」を手話で行いました。

お手伝いいただいた方々に感謝します。

退職にあたって

国際文化学科助教授

齋藤 祐介



本年三月末日をもって、敬和学園大学を退職致しました。一九九二年四月に赴任以来、八年間、阿賀北の地において、私にとって初めての大学専任教員としての生活を送ったことになりました。

これはいまだに周りの人々に折にあふれて申し上げるのですが、大学入学以来長年住み慣れた首都圏を離れ、新潟に居を移した際には、当地の気候風土についてまず驚いたのは「雪」ではなく、風の強さです。とくに冬になると日本海から雪とともに強い季節風が吹きつけ、私の生まれ故郷では台風風の到来時を除けばあまり接することのない「暴風（雪）警報」が頻繁に発令される一方で、時には雷がそれに交じるといった光景は、日本列島における気候の多様さというものを実感させるものだったと思います。同時に、そうした洗礼を毎年受けるにつれ、いつしか晩秋になると心身ともに無意識のうちに身構えている自分を発見し、陳腐な表現ながら「風土と県民性」についても考えさせられたものでした。

年度によって多少の違いがありましたけれども、大学の授業では「政治学」、「総合英語A」、「国際関係論」、「アメリカ研究B」、「国際関係演習」を担当しました。比較的自己の専攻分野に近い科目だったこともあって準備に戸惑うといったようなことは滅多にありませんでしたが、学生諸君に講義の内容をよく理解してもらったため、いかに

平易に説明するかについてはまさに試行錯誤という感じでした。社会科学に対する関心や興味というものは、学生の社会性あるいは成熟度、つまり彼らがどのくらい「大人」になっているかということに比例するといつて必ずしも間違いではないと思います。教壇に立つ私自身を含め日本人全体が幼稚化しているといわれるなかで、この課題は今後の教員生活においても大きな意味をもつものと自戒しています。

最後になりましたが、この八年間、ご教示、ご叱正を賜った教職員、学生の皆様に深くお礼を申し上げたいと思います。本当に有難うございました。

大学改革の時代

教務課長

古田 徳夫

長年高等学校に勤務して、敬和学園大学にお世話になり、体調すぐれずわずか二年で退職することになりましたが、この間に大学改革に接するという貴重な経験をさせてもらいました。過去に経験した高校改革の流れの先にあつたのが、大学改革です。本学では、放送大学と単位互換協定の締結、県内他大学との連携計画、セメスター制への移行とカリキュラムの改正、それに伴うコース制の導入、教職課程の改正、また、多様化する学生に対応するために、基礎演習を必須とし、ホームヘルパー三級資格を取得できる講座も開設するなど、確実に大学は変わっていきます。さらに、新しい取り組みとして、大学高校連携協議会が発足しました。これは、同一法人の敬和学園高校との相互理解を深め、将来は高校三年と大

学一年との授業提携も視野に入れた改革に繋がるものと思います。新年度から、埼玉大学と県立浦和高校では授業提携をし、大学で取得した単位を高校で卒業単位として認める、ということを始めようです。中高一貫、高大連携、学部と院との接続、こう見て来ますと、旧制の中学、高等学校、大学という姿が見えてくるような気がしますが、うがち過ぎでしょうか。ともあれ、いま大学は大きな変革のさ中にあります。十八歳人口の減少と大学の大衆化、大学の機能として研究と教育に、さらに社会との接点を求めて、積極的に改革を推進する行方に、大学の将来があります。拙速に走ることなく、整合性を計りつつ均衡のとれた改革は、必ずや大学の輝かしい発展に繋がるとして。敬和学園大学の未来に榮光あることをお祈り致します。

ご苦労様でした

三月三十一日付で職員の齋藤一浩さんが退職されました。齋藤さんは、開学直前の一九九一年一月から当時の設立準備室に勤務され、開学後は教務課学生係、図書係、教務課施設係として九年間勤務されました。最近では学バスを運転する機会が多かったので、学生諸君には身近な存在だったと思います。

また、昨年十一月二十五日付で教務課入試室入試係の二宮達也さんが退職されました。二宮さんは本学の三回生で、一九九七年四月から勤務されました。

お二人の今後のご活躍をお祈りします。

一九九九年度後援会

事業報告

大学後援会は、一九九九年四月三日入学式後の総会で、新年度事業と予算を可決承認し、石井富男会長をはじめ新役員を承認して正式にスタートいたしました。

本後援会は、一九九〇年十二月に設立され、以来会員の協力をいただきながら、学生に直接関係する設備備品や大学の環境整備改善等、学生が快適な大学生活をおくれるよう大学の強力な後楯となって今日まで発展してきました。

総会後における後援会の事業執行状況について主なものを報告いたします。

○四月二十八日役員会を開き、新年度事業と予算に対する執行計画について決定。役員会は年度末までに四回開催。

○四月テニスコートの補修整備援助。冬期間雪のため損傷が出た。

○四月クラブ室を整理し、各種道具を格納するプレハブ倉庫を設置。

○四月図書館に学生用パソコンを増設。

○五月体育館を多目的に使用するため床シート、及び折りたたみ椅子寄付。

○八月学生が休息するピロティの腰掛設置。改装工事補助。

○十月九日午後二時から新潟市ホテル・イタリア軒で、三年次生保護者の懇談会開催。「本学の就職指導の取り組みについて」説明。保護者から強い関心が寄せられた。懇親会に移ってからも、個別面談ではゼミの先生方も加わり、終始和やかな雰囲気

気の中で会が進められた。七十二組、八十名出席。

○十一月六、七日学園祭開催。学生中心の実行委員会が主催。両日も晴天で大盛況。新発田市、聖籠町から特別出展。小学生のサッカー指導等も加わり例年になく盛り上りをみせた。後援会援助。

○十一月九日午後四時から新潟市ホテル新潟で企業との就職懇談会開催。八十二社、九十名出席。大学教職員、後援会役員等出席。厳しい雇用状況の中で親しく意見交換し、企業の方々に対し、採用について特段の要請をした。

○その他援助・協力した事柄
◇学生団体活動に対する援助
◇学生団体優秀個人、団体に対する表彰

◇敬和カレッジ・レポート年四回発行
◇テニスコート・学生駐車場用地の借地料援助

◇教職員研修活動助成
◇卒業式後の謝恩会に対する援助

◇会員に対し災害見舞
等々であります。



寄付者ご芳名

- 一般 岩野見江子 北垣宗治
- 新潟教会婦人会 新潟市朝禱会
- 千葉教会 伊藤清子
- 東中通教会 新潟信濃町教会
- 松井愛美 オレンジ会
- 一九九一組 小野澤武晴 塩谷真澄
- 飯沼正志 川本正仁
- 宮澤聡子
- 一九九三組 栗栖仲次 丸山仁史
- 山田雅人
- 一九九四組 佐藤浩雄 斎藤益生
- 中野貴之 船木良造
- 広瀬雅子
- 一九九五組 岩村忠輔

お詫び

前号掲載の寄付者ご芳名のうち新潟YWCAのお名前を誤って掲載いたしました。お詫びして訂正いたします。

学事予告

◆四月◆

- 五日 新入生歓迎公開学術講演会
- 十一日 前期講義開始
- 二十七日 新入生オリエンテーション
- (二十八日)

キャンパス日誌

1月

- 8日 講義再開
- 12日 教授会
- 13日 伊藤豊治 教授 最終講義(写真)
「ゴールディングの通過儀礼について」



- 14日 チャペル・アッセンブリー・アワー②
説教 北垣宗治 学長「新しい創造」
講演 田原綱郎 教授「性悪説のすすめ」(最終講義)
- 15日 大学入試センター試験(～16日)
- 17日 学生団体年度内表彰
- 19日 敬和フォーラム⑤
講師 菅野 浩 教授「石油文明の未来」(最終講義)
- 21日 学園常務委員会
- 22日 外国人留学生入学試験
- 24日 学年末試験(～2月10日)
- 26日 ケーリ・ニューエル奨学金授与式(写真)
臨時教授会



- 27日 理事会
- 28日 外国人留学生入学試験合格発表
- 31日 一般入学試験(A日程)

2月

- 1日 一般入学試験(B日程)
- 2日 学園中・長期計画検討委員会
- 7日 教授会
- 9日 一般入学試験(A日程・B日程・センター試験
利用入学試験)合格発表
- 12日 春期休暇(～3月31日)
- 14日 3年次生個別面談(2月23日)
- 19日 学年末追試験(2月23日)
- 20日 春期短期留学出発(アングロ・コンチネンタル)
(～3月24日)
- 22日 編入学試験(第二次募集)
- 24日 学内合同企業説明会
- 25日 学園中・長期計画検討委員会
- 28日 臨時教授会

3月

- 3日 編入学試験(第二次募集)合格発表
- 11日 一般入学試験(C日程)
- 15日 教授会
ファカルティ・リトリート(～16日)
- 17日 一般入学試験(C日程)合格発表
- 19日 映画鑑賞会「アイ・ラブ・ユー」
- 21日 学園常務委員会
- 22日 第6回卒業式、卒業生謝恩会
- 24日 退職される先生を送る会(写真)



- 30日 理事会・評議員会
- 31日 学年終わり